岩波書店『図書』2023年5月号、pp. 22-26

大学入試って何を試したいの？（上）

広瀬　巌

日本の大学教員にとって入試業務が負担とストレスになっているというぼやきをしばしば耳にする。大学入試は受験生が何年も必死に勉強して臨む試験である。入試業務を軽んじることは許されまい。しかし、カナダの大学で長らく勤務する教員にとっていまいちピンとこない。なぜ、大学側にも受験生側にも極度の負担とストレスを強いる入試制度になってしまったのか、してしまったのか。

負担とストレスは大学教員にだけ課せられているわけではない。小学校の「お受験」から始まる日本の受験制度は子供たちと親たちに膨大な資金や労力、そして時間という負担を課している。その負担を超える便益が、現在の受験制度から得られているのだろうか。そして大学入試でクライマックスを迎える日本の入試制度は何を試したいのだろうか。

私は教育制度の専門家ではないので、これらの問いに答えることはできない。しかしどのような基準で良い生徒とそうでない生徒を判断するかについては、私個人の経験から一つの見方を提供することができるかもしれない。

一般に北米の大学ではアドミッション・オフィスが選考のすべてを行い、教員が出てくる幕はない。実際、アドミッション・オフィスがどのような基準で選んでいるのか、どのような学生が入学してくるのか、これらは教員に説明されることはない。当然、高校での成績が重要な指標らしい。とはいっても高校のレベルもさまざまだろう。レベルの違う高校の成績をどうやって比較しているのだろうか。アドミッション・オフィスは人種、ジェンダー、出身地域、言語などの多様性も考慮に入れているようだ。ただ、私は入試業務をさせられているわけでもないので、不平を言える立場にはないのかもしれない。

日本の入試制度と違いザックリとした

選考をしている分、北米では入学してからの成績平均点、ＧＰＡ（Grade Point Average）が学生や大学、雇用企業にとって関心の中心になる。専門性の高い学士課程（honours program）に入れるかどうかは入学後のＧＰＡによって決まるのだが、この専門学士課程が学生に勉強をさせる最大の原動力になっている。そしてhonours programを修了したかどうかが、大学院選抜や就職活動など、後の人生の岐路を大きく左右することになる。

北米の大学で入試業務に関わったことがないからといって、全く経験したことがないわけではない。私がまだ駆け出しの研究者だった頃、英国で入試業務に関わったことがある。私は英国オックスフォードのユニバーシティ・カレッジ哲学研究フェローとして研究者としての第一歩を踏み出した。研究フェローなので入試などの業務を行う義務はなかったのだが、先輩の哲学フェローの一人が外部資金を得てカレッジ業務を複数年免除されていたので、私に入試業務の依頼が来たというのが背景だった。

オックスフォードの学部入試の仕組みを正確に説明するのは簡単ではない。まずオックスフォード大学と市内に点在するカレッジの関係を説明するだけでも大変である。例えば、ユニバーシティ・カレッジによって面接・採用されていた私は、同カレッジにしか義務を負わなかった。しかしカレッジを通じてオックスフォード大学哲学部のメンバーでもあった。しかしここではこのような面倒な背景をすべて忘れて、次のことだけ言っておけばよいだろう。学部生はそれぞれのカレッジによって選考され、合格した学生はカレッジを通じてオックスフォード大学に入学する。つまり学部生の選考は大学ではなく、主にカレッジのフェローによって行われる。

オックスフォードのシステムでは、受験生はオックスフォード大学が提供する「プログラム」についてカレッジに応募する。日本のように「学部」に応募し選考されるのではない。オックスフォード大学では哲学を単科で勉強することはできない。哲学はいつも他の科目と組み合わされたプログラムの一部として勉強することになる。もっとも大きなプログラムは「哲学、政治学、経済学」（ＰＰＥ）で、私がカレッジで教えた学生のほとんどがこのプログラムの学生である。カレッジによって違うが、私がいたカレッジでは「心理学と哲学」「数学と哲学」「現代外国語と哲学」で若干名の学生を受け入れていた。しかし「歴史と哲学」の学生は募集していなかった。

書類審査を通過した受験生は、カレッジの学部生が帰省した十二月にカレッジに数日間滞在し、筆記試験と面接を受けることになる。通常、筆記試験がまず行われ、次の日に二つの面接を受けることになる。それぞれのカレッジが出した筆記試験の「過去問」は書籍やインターネット上で面白おかしく紹介されている。

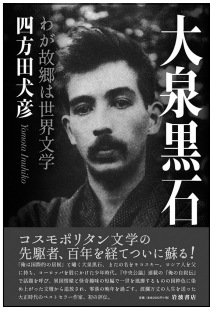
しかし面接で出された問題はあまり見かけない。稀に出ていても、創造力のある回答が求められているのだろうと推測しているものが多い。面接する側にしてみれば、そう見えるのかなぁという感じだった。

面接で出す問題については、他のカレッジの哲学フェローとの飲み会などで話題にのぼることはよくあった。当時の哲学フェローの間で人気だったのは、米国の哲学者グレゴリー・カフカの「毒液の謎かけ」(Gregory Kavka, "The Toxin Puzzle". *Analysis*. Vol.43, [1983])。この有名な哲学問題を面接で質問するというフェローが何人かいた。

多くのカレッジでは、受験生は二つの面接を受けさせられる。例えば私のいたカレッジでは、「哲学、政治学、経済学」の選考の場合、政治学と経済学のフェローが一つの面接、哲学のフェロー二人がもう一つの面接をするというのが慣習だった。各面接はだいたい二十分程度で、フェローの研究室で行われる。面接には二人のフェローと受験生以外誰もおらず、事務方の職員が同席することもない。

オックスフォードでの入試業務が初めてだった私は、カレッジの先輩哲学フェロー、イアン・ラムフィット(Ian Rumfitt)の補佐役を担った。イアンは当時すでに言語哲学者として著名で、その後ロンドンのバークベック・カレッジとバーミンガム大学で正教授を歴任し、現在はオックスフォードの名門カレッジ、オール・ソウルズ・カレッジの上級フェローとして活躍している。物腰が柔らかく、ユーモアのセンスも抜群で、駆け出しの研究者であった私の相談にも乗ってくれる兄貴のような存在だった。

さて、私はといえばオックスフォードに引っ越して間もないうえ、オックスフォードの独特なシステムと伝統も知らない新参者。当然、カレッジの面接がどういうものなのかも全く知らなかった。そ



◉幻の作家の初の評伝

大泉黒石

—わが故郷は世界文学

四方田犬彦

『俺の自叙伝』で一世を風靡した大正時代の作家、大泉黒石。忘れられた異端の文学者が、今、蘇る。

四六判 定価2750円

岩波書店

こでイアンに面接とはどういうものか教えてくれないかと相談したところ、二つ返事をもらいパブに行くことになった。まずイアンに面接の概要を教えてもらい、そして面接で使う問題を一緒に考えることにまでなった。入試に関して過剰にピリピリする日本の大学から見ると、学生街ど真ん中のパブでビールを飲みながら入試問題の作成をするなど想像すらできないだろう。その辺がオックスフォードの大らかなというか、いい加減なところなのかもしれない。とはいえ、入試は極めて重要な業務である。間違いがあってはならない。よって二人で翌週に別のパブでビールを飲みながら問題を再チェックした。

面接は十二月にイアンの研究室で三日間にわたって行われた。

若輩者の私が受験生をイアンの研究室に呼び込み、ソファーに案内する。ポート・メドーという巨大な公園(正確にはクライストチャーチ・カレッジの領地)を見渡す格調高い研究室。二人の哲学フェローと受験生。この時期はいつも曇り空で、小鳥のさえずりさえもない。古い置き時計の秒針の音だけがチック・タックと聞こえるだけ。受験生の顔はこわばっている。それを見ているこっちも切なくなってしまう。まず私たちがそれぞれ短く自己紹介。受験生も「入学したらこのフェローに教わるんだな」というような感じで私たちの顔をチラ見する。

場を和ませるために、私たちは何でもいいから哲学に関係するものを読んだことがあるかを聞くことから始める。哲学書をガッツリと勉強したことがある受験生はほとんどいない。当時(二〇〇三年頃)は、倫理学の初歩を勉強したことがある受験生がちらほら、ヨースタイン・ゴルデルの『ソフィーの世界――哲学者からの不思議な手紙』(池田香代子訳、日本放送出版協会、一九九五年)を読んだことがあるという受験生がちらほら、といった程度だ。一分弱の会話だが、雰囲気がほんの少しだけ和む。受験生も研究室をぐるりと見回すくらいの落ち着きを取り戻す。

そこで私がすっと一枚の紙を受験生に渡す。受験生の顔がまた少しこわばる。A4紙の表裏には問題が印刷してある。

イアンが問題の設定を説明し始める。

「真実さんと嘘さんがいます。真実さんが言うこと書くことはすべて真実で、嘘さんの言うこと書くことはすべて偽りです。中の見えない箱がいくつかあり、それぞれの箱には短い一文が彫られています。それぞれの箱の一文は、真実さんか嘘さんかのどちらか一人によって書かれました。ここまでいいですか？　なにか質問ありますか？」

変な設定だなと思っているようだが、だいたい理解できているようだ。イアンが続ける。

「三つの問題があるので、それぞれの問題を私たちと一緒に読んで、一緒に考えていきましょう」

＊＊＊

第一問　爆発を回避せよ

あなたの目の前にA、B、Cの三つの箱があります。一つの箱には開けたら爆発する爆弾が装着されていること、そして他の二つの箱は空だということがわかっています。それぞれの箱には次の文章が彫られています。

箱A「この箱の中には爆弾があります」

箱B「この箱は空です」

箱C「これら三つの箱の中で、真実さんが作った箱は最大でも一つです」

あなたは三つの箱のうち一つを開けなければなりません。当然、爆弾の入っている箱を開けたくはないでしょう。あなたはどの箱を開けますか？

第二問　ダイヤモンドを手に入れよう

あなたの前にDとE、二つの箱があります。一つの箱にはダイヤモンドが入っている、そしてもう一つの箱は空だということがわかっています。それぞれの箱には次の文章が彫られています。

箱D「ダイヤモンドはこの箱には入っていません」

箱E「これら二つの箱のうち一つは、真実さんが作りました」

あなたはどちらか一つの箱を開けることができます。もしダイヤモンドが入っている箱を開けたら、中のダイヤモンドはあなたのものです。あなたはどの箱を開けますか？

第三問　ダイヤモンドを手に入れよう（第二弾）

あなたの前にFとG、二つの箱があります。一つの箱にはダイヤモンドが入っている、そしてもう一つの箱は空だということがわかっています。それぞれの箱には次の文章が彫られています。

箱F「ダイヤモンドはこの箱には入っていません」

箱G「これら二つの箱の文章のうち一つだけが真実です」

あなたはどちらか一つの箱を開けることができます。もしダイヤモンドが入っている箱を開けたら、中のダイヤモンドはあなたのものです。あなたはどの箱を開けますか？

＊＊＊

さあ、皆さんも受験生の頃に戻ったつもりでこれら三つの問題を考えてみませんか。解説は次号の『図書』で。

（ひろせ　いわお・マギル大学教授・道徳哲学）

岩波書店『図書』2023年6月号、pp. 22-26

大学入試って何を試したいの？（下）

広瀬　巌

前号では英国オックスフォードのユニバーシティ・カレッジで先輩哲学フェローのイアン・ラムフィット（Ian Rumfitt）と当時新任哲学フェローだった私が行った面接試験の問題を示して終わった。A4紙の裏表に書かれていた問題は次の通り。なお、真実さんが言うこと書くことはすべて真実で、嘘さんの言うこと書くことはすべて偽りと決められている。

＊＊＊

第一問　爆発を回避せよ

あなたの目の前にA、B、Cの三つの箱があります。一つの箱には開けたら爆発する爆弾が装着されていること、そして他の二つの箱は空だということがわかっています。それぞれの箱には次の文章が彫られています。

箱A「この箱の中には爆弾があります」

箱B「この箱は空です」

箱C「これら三つの箱の中で、真実さんが作った箱は最大でも一つです」

あなたは三つの箱のうち一つを開けなければなりません。当然、爆弾の入っている箱を開けたくはないでしょう。あなたはどの箱を開けますか？

第二問　ダイヤモンドを手に入れよう

あなたの前にDとE、二つの箱があります。一つの箱にはダイヤモンドが入っていること、そしてもう一つの箱は空だということがわかっています。それぞれの箱には次の文章が彫られています。

箱D「ダイヤモンドはこの箱には入っていません」

箱E「これら二つの箱のうち一つは、真実さんが作りました」

あなたはどちらか一つの箱を開けることができます。もしダイヤモンドが入っている箱を開けたら、中のダイヤモンドはあなたのものです。あなたはどの箱を

開けますか？

第三問　ダイヤモンドを手に入れよう（第二弾）

あなたの前にFとG、二つの箱があります。一つの箱にはダイヤモンドが入っていること、そしてもう一つの箱は空だということがわかっています。それぞれの箱には次の文章が彫られています。

箱F「ダイヤモンドはこの箱には入っていません」

箱G「これら二つの箱の文章のうち一つだけが真実です」

あなたはどちらか一つの箱を開けることができます。もしダイヤモンドが入っている箱を開けたら、中のダイヤモンドはあなたのものです。あなたはどの箱を開けますか？

＊＊＊

では、標準的な面接が実際にどのようなものだったかを再現しよう。まず第一問。受験生はだいたいあっけにとられているので、イアンがすぐに推論の緒を示す。

「三つの箱の文がありますが、どの箱が手がかりになりそうかな？」

「えー、箱Cかな。」

これには書類審査を通った受験生はほぼ全員すぐに気づく。

「じゃあ、真実さんが箱Cを作ったとしたら？」

「だとしたら、箱AとBは嘘さんによって作られたことになります。ということは箱Aには爆弾が入っていない、そして箱Bには何かが入っている。だから箱Aを開けます！」

と早合点してしまう受験生はさすがに少ない。もし早合点してしまう受験生がいたら、イアンはすかさずツッコミを入れる。

「ちょっと待って。箱Cが嘘さんによって作られた場合は考えないの？」

「あ、そうか。箱Cが嘘さんによって作られたとしたら、真実さんによって作られた箱は二つ以上のはず。そうすると箱Aと箱Bは真実さんによって作られたということ。あれれ。さっき箱Aを開けますって言ったなあ。あ、箱Cが真実さんによって作られたとしたら箱Aには爆弾が入っていない、嘘さんによって作られたとしたら箱Bには爆弾が入っていない。あれれ」

「爆弾が入っていない箱は二つあるんだよね」

「あ、そうか。箱Aと箱Bに爆弾が入っている可能性を排除できないのに対し……」

ここまでくれば、もう正解は明らか。書類選考を経て面接にまでたどり着けた受験生はバタつきながらもほとんど第一問は正しく推論することができる。第一問は手始めなのでいくらバタついても一向に差し支えない。

「では第二問。どの箱を手がかりにしようか？」

「箱Eでしょうね。もし箱Eが真実さんによって作られたとしたら、箱Dは嘘さんによって作られたことになる。よって箱Dにダイヤモンドが入っているはずです。もし箱Eが嘘さんによって作られたとしたら、両方の箱が真実さんによって作られたか、両方の箱が嘘さんによって作られたかのどっちかのはず。両方の箱が真実さんによって作られたとしたら……」

私たちはとっさにツッコミを入れる。

「いまのところに矛盾はなかったかな？」

「あ、箱Eが嘘さんによって作られたと仮定した場合、両方の箱が真実さんによって作られたということはありえない、つまり両方の箱は嘘さんによって作られたという可能性しかありえないな。ということは……」

ここまでくれば正解は明らか。自分で置いた仮定を忘れていないか、仮定と推論に矛盾がないか、これに気づくことができるかを試していたわけである。受験生のほとんどは、私たちのツッコミの意味をすぐに理解してくれる。これら最初の二問でバタつきながらもなんとか推論できることが高評価を得る必要条件である。

「では第三問はどう？　どの箱を手がかりにする？」

「(水を得た魚のように)箱Gから始めます。もし箱Gが真実さんによって作られたとしたら、箱Fは嘘さんによって作られたことになるので、箱Fにダイヤモンドが入っていることになる。もし箱Gが嘘さんによって作られたとしたら、真実さんが二つとも作ったか、もしくはどちらも作らなかったことになるのだが、嘘さんが箱Gを作ったと仮定しているので、真実さんが二つとも作ったということはありえない。よって嘘さんが箱Fを作ったことになり、箱Fにダイヤモンドが入っていることになる。よって、誰が箱Gを作ったかにかかわらず、箱Fにダイヤモンドが入っていることになります！」

と元気に推論した受験生は及第点としてもいいのかもしれない。でも私たちが本当に試したいのはこれから。

「そう結論したくなるよね。でも箱Fを開けてみたらダイヤモンドが入っていなかった、ってことありえない？」

ここが面接の最大のヤマ場。半分くらいの受験生は完全に何がなんだかわからなくなり、フリーズ状態になる。また手がかりを与える。

「第二問と第三問は似てるけど、違うよね」

三分の二くらいの受験生は「真実さんが作りました」と「真実です」が意味することの違いをどうやって理解しようか、どう言葉で表現しようか、アワアワする。しかし次のようなことを言う受験生もいる。

「もし箱Gが真実さんによって作られ、かつ箱Fが嘘さんによって作られた場

合、箱Gに書いてある文はなんかおかしいなあ。意味ないし。というか、真実の内容がないというか、何が真実か確かめようもないし。そもそも両方の箱を真実さんが作ったとしてもおかしくないんじゃないかな。箱Fの文が真実だとしても、箱Gの文章は真実なのかな、それとも嘘なのかな」

このあたりまで考えを進めることのできる受験生は高評価を受ける。実際、このレヴェルの評価を受ける受験生は少なからずいる。

さて、私たちが試したかったことは明らかであろう。最初の二問は純粋に論理的に推論する能力を試すことを目的としており、正解か誤答かがはっきりしている。しかし正解を答えること自体が重要というわけではない。第一問では選択肢は三つしかないので、当てずっぽうで一つを選んだとしても正解の確率は三分の一である。確率としては悪くない。しかし当てずっぽうで正解する運のよさで受験生の優劣をつけるのはどう考えてもおかしい。私たちが知りたかったのは、正解を答えられるかではなく、推論する能力である。

これに対し第三問に正解はない。第三問は根本的な問題を察知し言葉で表現することができるかを試している。つまり、箱Fにダイヤモンドが入っていない可能性を想像できるか、そのような可能性を言葉で表現できるか、そして(欲を言えば)なぜそのような可能性がありえるのかを説明できるか、これらを試している。第三問は、論理学や言語哲学における自己言及の問題に関わっている。しかし自己言及の真偽論を知っているかどうかの知識を試しているわけでもなければ、自己言及の真偽論についてどのような哲学的立場が存在するかの知識を試しているわけでもない。突飛な創造力や奇をてらった自己アピールが求められているわけでもない。大切なのは、おかしな推論にハマってしまったときに何かがおかしいなとピンとくるか、問題がなんとなく根本的だと直感することができるか、そしてどうして根本的な問題なのかをなんとなくでも表現することができるかである。

私たちが出した面接問題が優れたものだったと断言する勇気はない。ただ、第一に論理的に推論することができるか、第二に根本的な問題を察知することができるか、これらを試すという明確な目的があった。このような問題がすべてのレヴェルの大学入試で適当だとは思わない。ただ、知識量や勘、こなした過去問の数などによって測ることができない重要な能力をテストしていたという自負だけはある。

海外に長く住んでいると、日本の国際的地位が相対的に低下しているのを実感する。天然資源が乏しい日本で頼りになる資源は人的資源のみである。生産年齢人口は長い少子化の過程の結果、数十年

後にはピーク時から半減すると予想されている。こうなることは二十年前にはわかっていた。人的資源の激減を相殺するには一人あたりの生産性の向上が必要であり、そのためには人的資源への投資、つまり教育が重要である。イノヴェーションを起こしてくれそうな人材を育てる教育や入試システム、そして企業採用基準を作ろうとしてきただろうか。

高校で教えられる内容を遥かに超えた難問を入試に出す大学、入試突破の難易度によって大学の序列を印象づける社会、大学で何を会得したかに関心を払わずに大学の学部の肩書をもっぱらの採用基準にする企業、お受験に奔走する親、そして受験産業。これらはお互いにしがらみとなり、安定した均衡を維持している。しかしその均衡から抜け出せないことを政府や制度、文化などのせいにするのは怠惰であるように見える。受験生、親、高校、大学、そして企業それぞれが、どのような能力をつけるために勉強するのか、その能力を試すにはどのような選抜方法が最良か、そしてその能力をつけるためにどの程度のコストと投資が最適なのか、これらを真剣に考えなおす必要がある。複数の国の大学に勤務してきた私の目には、日本では、受験生と親に求められるコストが膨大な割に社会的便益は少ないように見える。

私が特に残念に思うのは、この受験制度がとりこぼした才能が大きな社会的損失だという点である。受験勉強が嫌いで数学が嫌いになってしまう若者。ある特定の分野では優秀だが、他の分野が苦手なため、受験に失敗する若者。経済的余裕がないために、コストのかかる受験に参加さえできない若者。これら「とりこぼし」の数が現行入試制度では膨大なはずだ。明らかに自閉症や学習障害をもちながら極めて革新的な哲学の業績を残した哲学者を少なからずこの目で見てきた私には、そのようなとりこぼしがとても残念で仕方がない。

さて、ここまでオックスフォードのカレッジ入試を手がかりに入試のあり方について偉そうに述べてきたが、重要な事実を告白しておかなければならない。実をいうと、私は高校受験以外ほぼ入学試験を受けたことがない。地元の公立中学校から私立大学付属高校に進学し、そこから持ち上がりで大学に入学した。それもこれも、中学生のときから現在に至るまで私が一貫して持っている信念があったからである。その信念とは、できるだけ楽をして生き、自分に興味があることだけをする、である。いま振り返ると、かなりコスパのいい人生を送ってきたという満足感と羞恥心を半々で感じる。

（ひろせ　いわお・マギル大学教授・道徳哲学）